

え島をへだて、瀬々かたぐにわかれたり。

〔東關紀行〕菊川をわたりて、いくほどもなく一村の里あり、こはまとぞいふなる。此里のひがしのはてに、すこじうちのぼるやうなる奥より、大井川を見渡したれば、遙々とひろき河原の中に、一すぢならず流わかれたる川瀬ども、とかく入ちがひたる様にて、すながしといふ物をしたるににたり、中々わたりてみんよりも、よそめおもしろくおぼゆれば、かの紅葉みだれてながれけん龍田川ならねども、玄ばしやすらはる。

日數ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな

〔十六夜日記〕廿五日、きく河をいで、けふは大井河といふ河をわたる、水いとあせて、聞しにはたがびてわづらひなし、河原いくりとかやいとはるかなり、水のいでたらんおもかげ、おしはからる。

思ひ出る都のことはおほる河いくせの石の數も及ばじ

〔吾妻道記〕天文二の年神無月後の四日に、あづまのかたへ、ことのようありて下り侍るに。○中略 大井川をわたるに、都のあたりにおなじ名あれば、それさへゆかしくて、

都にしかよふこゝろの大井川名にたつ浪はかへりもやする

〔東國紀行 宗牧〕こよひすぐさす大井川をわたるべしとて、あなたの麓にて駒かはせたる、いくせしらなみとか見わたされしにかはりて水もあさし、數日雨にもあはぬゑるし成べし、

〔信長公記十五〕天正十年四月十五日、田中未明に出させられ○中略 大井川乗させられ、川の面に人餘多立渡り、かち人聊爾無様に渡し申候也、
〔東武紀行〕旅人には、心をかべの郷ながら、晝のやすらひして、さらす思ふ藤枝の花波かる大井川をわだる、